abbvie

PRESS RELEASE

2019 年 6 月 26 日

アッヴィ 自己免疫疾患 アートプロジェクト「PERSPECTIVES(パースペクティブズ)」表彰式開催

- **募集テーマは「疾患と生きる。私の新たな可能性」**
- **5 歳から 89 歳までの患者さんが、ご自身の視点で心とカラダを自由に 81 点のアート作品に表現**

アッヴィ合同会社（本社：東京都港区、社長 ： ジェームス・フェリシアーノ）は、自己免疫疾患をもつ患者さんを対象とした「アッヴィ　自己免疫疾患　アートプロジェクト『PERSPECTIVES』」の表彰式を 6 月 20 日（木）に開催いたしました。

本プロジェクトは、患者さんが自己免疫疾患と向き合いながらも、ご自身の PERSPECTIVES（視点、考え方、物の捉え方という意味）で捉えた心とカラダ、症状の改善などから見出した日々の喜び、希望や目標などを、自由に絵画、彫刻、立体造形、陶芸、写真、書道、手芸などのアート作品に表現していただくことにより、疾患や患者さんへの理解につなげることを目的に実施されました。2018 年 7 月 1 日から 11 月 30 日にかけて「作品」と「作品に関わるエピソード」の募集を行い、5 歳の若年性特発性関節炎の女児から最高齢 89 歳のリウマチ患者さんまで、81 点の応募がありました。受

abbvie

賞作品については、美術家の佐久間あすか氏をはじめとした 11 名の審査委員による厳選なる審査により、最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、審査員賞 3 名、佳作 4 名の計 10 点が決定いたしました。

審査委員を代表して美術家の佐久間あすか氏は、「第 1 回に続き第 2 回も沢山の逸品が集まりました。惜しくも受賞を逃した作品もとても素晴らしいものが多く、良い意味で、審査が難航したことを覚えております。最終的な審査では、上手い下手で分けるのではなく、疾患に負けることなくアートを通して前向きに、そして魅力的に訴えかける作品を選ばせていただきました。審査にあたって、一番に感じた事は、疾患に負けない表現力がどの作品にも備わっていたことです。自己免疫疾患という深刻な病を抱えている患者さんの力強さと生命力と明るさを感じる作風が多かったのは驚きでした。そして、審査をしている私にも希望や勇気を注いでくれた気がいたしました。アートを通して強く前向きに表現するということは、同じ病で悩む他の方々にもきっと希望の光が見え、勇気や意欲が湧いてくるのではないかと思います」と述べています。

アッヴィは、本プロジェクトを通じて、ひとりでも多くの方が患者さんの思いを理解し、支援することができるよう、今後も継続的なサポートを行ってまいります。
なお、「アッヴィ　自己免疫疾患　アートプロジェクト」の受賞作品を含む全応募作品は、アッヴィ合同会社のホームページ（https://www.abbvie.co.jp/）にて、6 月 28 日より公開の予定です。

アッヴィ　自己免疫疾患　アートプロジェクト」の受賞者は下記の通りです。なお、受賞者及び受賞作品についての詳細は別紙をご参照ください。

■受賞者（応募総数：81 点） **※敬称略**

最優秀賞	久慈　唯華（くじ　ゆか）	「やっと生まれた」	（東京都）
優 秀 賞	熊谷　正代（くまがい　まさよ）	「食」	（京都府）
	岩本　紗和（いわもと　さわ）	「歩く・走る・跳ぶ」	（茨城県）
審査員賞	森　あけみ（もり　あけみ）	「なお　生きる」	（神奈川県）
	高橋　誠（たかはし　まこと）	「過ぎ去り日々～Day Dream～」	（滋賀県）
	橋本　冬香（はしもと　ふゆか）〔仮名〕	「大人になった自分より」	
佳　　作	横山　和子（よこやま　かずこ）	「光ありて」	（埼玉県）
	白石　幸子（しらいし　さちこ）	「祈り」	（広島県）
	町田　忠次（まちだ　ただつぐ）	「地に着く手足」	（大阪府）
	仲田　やす子（なかだ　やすこ）	「心のアルバム　想い出の四季」	（千葉県）

abbvie

アッヴィについて

アッヴィは、グローバルな研究開発型のバイオ医薬品企業です。世界で最も複雑かつ深刻な疾患に対する、革新的な先進治療薬の開発を行っています。その専門知識、献身的な社員、イノベーション実現に向けた独自の手法を通じて、免疫疾患、がん、ウイルスおよび神経疾患の 4 つの主要治療領域での治療を大きく向上させることをミッションに掲げています。世界中の人々が持つ健康上の課題への解決策を進歩させるため、75 カ国以上の国でアッヴィ社員が日々取り組んでいます。アッヴィの詳細については、www.abbvie.com をご覧ください。Twitter アカウント@abbvie、Facebook、LinkedIn や Instagram でも情報を公開しています。

日本においては、1,000 人を超える社員が、医療用医薬品の開発、輸入、製造販売に従事しています。自己免疫疾患、新生児、肝疾患、神経疾患、がんの各領域を中心に、患者さんの生活に大きく貢献できることを願っています。詳しくは、www.abbvie.co.jp をご覧ください。

アッヴィ　今後の見通しに関する記述

本リリースにおける記載には、1995 年米国私募証券訴訟改革法に示される「今後の見通しに関する記述」が含まれています。「確信」「期待」「予測」「計画」という言葉およびそれに類する表現は、一般に将来予想に関する記述となります。当社からの注意喚起として、このような将来予想に関する記述はリスクおよび不確実性による影響を受け、実際の結果と将来予想に関する記述での予測との間に大幅な相違が生じる可能性があります。このようなリスクおよび不確実性には、知的財産に対する脅威、他社製品との競合、研究および開発プロセスに特有の困難、敵対的訴訟または政府による介入、業界に関連する法律および規制の変更などがあります。

アッヴィの経営に影響を及ぼす可能性のある経済、競合状況、政府、科学技術およびその他の要因については、Securities and Exchange Commission（米国証券取引委員会）に提出済みのアッヴィの 2018 年度アニュアルレポート（10-K 書式）の 1A 項「リスク要因」に記載しています。アッヴィは、法律で要求される場合を除き、本リリースの発表後に発生した出来事または変化によって、今後の見通しに関する記述を更新する義務を負わないものとします。

abbvie

perspectives Japan

受賞作品のご紹介

■最優秀賞（1 名）

久慈　唯華　さん　（30 歳）　東京都在住　　作品タイトル：「やっと、生まれた」（工芸）

＜久慈さんの受賞コメント＞

私は小学校 4 年生から乾癬になり、見た目の症状から中学・高校といじめられました。その頃から、私は人間ではなく、妖怪として隅っこで生きることにしました。しかし、何年か前に新しい治療に巡り合え、だいぶ症状が緩和されたことから、突然人間になってしまいました。人として生きることにより嬉しいこともたくさんありますが、今まで隅っこで生きていたので、逃れられない責任や戸惑い、希望など今までになかったことで、「どうしたらよいのだろう」と思っていた時に、このプロジェクトのお誘いをいただき、自分の「思い」を作品に収めることができました。今は、この機会をいただけてありがたく思っております。

【講評】

社会福祉法人聖母会 聖母病院　皮膚科部長　　小林　里実　先生

久慈さんの心を映したこの作品には、我々だけではなく、患者団体の代表の方々みんなが共感を覚えて投票し、最優秀賞に選ばれました。普段、私たちは患者さんを対象にアンケートをしたり、患者さんのお話を聞きながら、患者さんが困っていることを汲み取り、皮膚や関節を治すだけではなく、生活そのものを元に戻してあげたいと思いながら治療をしています。久慈さんは、小学校の時に発症し、中学の頃から友達や先生たちから違う扱いを受けたという経験をユーモアたっぷりにお話しされていましたが、その経験をビジュアル化すると、周りのサポートがあっても、殻の中に閉じこもってしまうことが、この作品から伝わってくる、いろんなことを我々に教えてくれる作品だと思います。

abbvie

■優秀賞（2 名）

熊谷　正代　さん　（57 歳）　京都府在住　　作品タイトル:「食」（工芸）

＜熊谷さんの受賞コメント＞

私は、10 年前に潰瘍性大腸炎を発症しました。最初、初めて聞いた名前で、どんな病気なのかと先生にお伺いしたところ、「大腸に潰瘍ができている、難病指定されている病気」ということを聞きました。聞いた時もはっきりわからなく、「まぁ、お薬を飲めばよくなるし、治るのかな」と思っていましたが、なかなか完治が難しい病気ということで、「とんでもない病気になってしまったな」と思いました。今でも、なかなか思うようには食事ができず、作品は、そのような状況への思いを込めて作りました。高級食材ではなく、B 級グルメばかりを表現した作品です。自分は常日頃、「食事がなかなかうまくできない、食べたいけど食べたらおなかが痛くなる、痛くなってしまったら数週間、数カ月、良くなるのに時間がかかってしまう」。誰にとっても「食」というのは毎日のことなので、とても辛くて、悲しい病気になってしまったなと思います。しかし、自分はこれから先もこの病気とうまく付き合っていかなければならないことを受け止めて、なるべく寛解の時期を続けられるよう、先生と一緒にコントロールしていきたいと思います。今後も潰瘍性大腸炎と上手にお付き合いしていきたいと考えています。

【講評】

NPO 法人 IBD ネットワーク　事務局長　　吉川　祐一　さん

食べることが何より大好きだったのに、潰瘍性大腸炎を発症してから食べたいものをじっと我慢してきた生活は、とても辛く悲しい毎日だったと思います。このアートプロジェクトの取り組みは、作者の心の持ちようをより前向きに変えるきっかけとなったのだと思います。実際に食べられなくても、空想の世界なら自由にごちそうを味わうことができます。満腹になることも食べ飽きることもありません。作者は食べたいものを心の中で味わいながらミニチュアフードを作り上げていったのでしょう。レストランのショーウィンドウから感じる「美味しそうだなあ」という心弾む瞬間をこの作品を見るたびに感じます。作者の「とっても美味しいんだよ」という気持ちがミニチュアフードの一つ一つにこもっていて、幸せな気持ちが伝わってきました。

岩本　紗和　さん　（5 歳）　　茨城県在住　　作品タイトル:「歩く・走る・跳ぶ」（貼り絵）

＜岩本沙和さん、お母さん・ゆう子さんのコメント＞

この度は素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。前回のアートプロジェクトでは佳作をいただき、2 度目の受賞はないと思いながらも、成長の記録を残すために応募しました。そのため、今回の受賞には大変驚き、前回を超える賞をいただけたことを大変光栄に思います。

沙和は、JIA（若年性特発性関節炎）に加えて、3 歳から両目にぶどう膜炎を患い、現在は新しい治療により運動制限はありながらも、なんとか生活しております。痛みや辛さで泣くことはありませんが、お友達と同じようにできないことへの悔しさや我慢で泣くことがあります。そんな中、「足の痛みから解放され、みんなと同じように歩けるように、走れるように、ジャンプできるように」との願いを込めて作品を作ることを思いつきました。

今もたくさん我慢しなければいけないことがあり、泣くこともたくさんありますが、それ以上に助けて下さる方や、優しく接してくれるお友達がたくさんいるおかげで、紗和は明るく笑顔で毎日を過ごせています。いつもお世話になっている皆様もきっと今回の受賞を喜んでくれることと思います。今後も感謝の気持ちを忘れずに、完治に向けて家族一丸となって頑張ります。

【講評】

医療法人財団順和会　山王メディカルセンター　リウマチ・痛風・膠原病センター長、
国際医療福祉大学臨床医学医学研究センター教授、東京女子医科大学 客員教授　山中 寿 先生

審査会場でこの絵を見たときに、その瞬間、涙が出ました。一番走り回りたい年代なのに走り回れない、そういうつらさが赤い紙いっぱいに散りばめられている。それを見たときに、その赤は、怒り、つらさの表現だと思い涙が出ました。その痛みに共感するとともに、我々の使命は、その赤をこの足から消してあげること。それが私たちの仕事だと強く思いました。それから、やさしいお母さんとお父さん、そして、お兄ちゃん、「家族に支えてもらっているんだなぁ」ということが良くわかります。これからもこれを励みに頑張って、どんどん元気になっていってください。

abbvie

■審査員賞（3 名）

森　あけみ　さん　（68 歳）　神奈川県在住　作品タイトル：「なお　生きる」（絵画）

＜森さんの受賞コメント＞

受賞の通知が届いたときは、驚きと喜びで舞い上がらんばかりでした。私の作品を選んでくださった審査委員の先生方にお礼を申し上げます。膠原病の「膠」という漢字と私が描いている日本画の画材である膠（にかわ）は同じ漢字です。それから、私の疾患の症状には、ほっぺたにできる蝶型紅斑というのがあり、私の作品の中にはよく蝶々が登場します。今は、「こんな偶然があるのだなぁ」と思っています。今回の受賞を励みに、これからも日本画を続けていきたいと思います。

高橋　誠　さん　（63 歳）　滋賀県在住　作品タイトル：「過ぎ去りし日々～Day Dream～」（絵画）

＜高橋さんの受賞コメント＞

毎日日記をつける人がいるように、私は子供の頃から絵を描いてきました。働きながら自由な時間を探して、空想の中でこれまで描き続けてきました。選んだ道を歩み、過ぎ去った日のことを振り返ったとき、このアートプロジェクトに参加させていただけた、そして皆様にお会いできたこと、そして大切な家族への感謝の気持ちでいっぱいになります。

abbvie

橋本　冬香さん〔仮名〕　作品タイトル:「大人になった自分より」(漫画)

＜橋本さんの受賞コメント＞

私はベーチェット病ですが、いまは素晴らしいお薬があり、治療のおかげでこうして元気に漫画を描けているので感謝しています。病気のことについては、漫画に描いたので読んでいただけたら嬉しいです。

【講評】

認定 NPO 法人東京乾癬の会 P-PAT 理事　大蔵　由美　さん

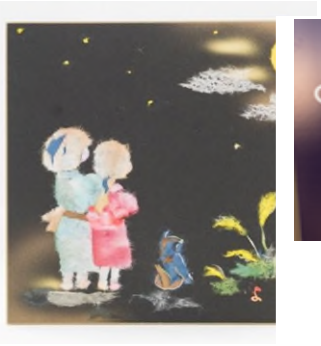
森さんの作品の大きな赤いハイビスカスからは「私は生きる、希望に燃えて」、そんな熱い決意が伝わり、大きな蝶が自由に飛ぶ姿は、まさに大空を自由に飛ぶ作者の心中を表しているのかなと思いました。「疾患を抱えていても私は自由なの、人生を楽しむわ」とそんな朗らかな思いが伝わってきました。

高橋さんは発症当時、病名もわからず不安な日々を過ごされたと思いますが、たとえ疾患を抱えていても今を大切にして、今を生きるために絵を描き続けられてきたことがとても素晴らしいことだと思いました。そして、作品には、周囲の支え、医療の進歩により「身も心も自由になれたんだ」という、苦悩の日々から解き放たれた瞬間が表現されていると思いました。

橋本さんの作品(漫画)を読んで、どんなに大変な疾患なのか、その一端がよくわかりました。辛かったこと、不安だったこと、そして辛くても夢を追い続けた様がよくわかりました。全ての思いがストレートに伝わってきました。漫画という特技を生かして、短い中でよくまとめられた作品だと驚きました。

■佳作(4 名)

横山　和子　さん　(88 歳)　埼玉県在住　作品タイトル:「光ありて」(ちぎり絵)



＜受賞コメント＞

8 年前に、朝ベッドから立とうと思ったら突然の痛みがあり立てなくなりました。悲鳴を上げるほどの痛みの中、家族が迅速に動いてくれて病院に連れて行ってもらいました。その後、1 年間の治療をしましたが痛みは取れず、薬を変えてもらったところ、どんどん体調が良くなってきたような気がします。自分でも一生懸命リハビリをし、今は周りの人から病気と気づかれないほど元気にしています。暇に飽かせて作ったつまらない作品ですが、今回お目に留めていただいき、天国へのおみやげが一つできました。ありがとうございます。

白石　幸子　さん （62 歳）　広島県在住　作品タイトル:「祈り」（絵）

＜白石さんの受賞コメント＞

現在は、関節リウマチの治療をしていますが、最初はリウマチの治療を拒否していました。それは、両親や家族が同じリウマチだったため、治療をしても一同じだという気持ちが強かったためです。しかし、10 年くらい経つと治療をしなくてはいけないくらいの強い痛みに襲われ、新たな治療を受けることになりました。その治療により症状が抑えられ、「昔の治療とやっぱり違うんだな、真剣に治療をしよう」と思うようになりました。同時に、何か自分にできること、趣味はないかなと思い、絵を描き始め、今回、応募いたしました。受賞したのはビギナーズラックというのでしょうか、「えっ、まさか」と思ったのですが、私の絵に共感してくださり、選んでくださった方がいらしたことに感謝します。この受賞を励みに、いろいろな作品を描いていきたいと思います。

町田　忠次　さん （74 歳）　大阪府在住　作品タイトル:「地に着く手足」（絵画）

＜町田さんの受賞コメント＞

絵を描くことには、20 年ほど前から取り組んでいます。抽象画です。ほとんどの人が抽象画はわかりません。僕の友達は「あんた文章はちょっと良かったなぁ」と言ってくれますが、絵のことは一切褒めてはくれませんでした。病気については、50 歳で重症筋無力症になり、52 歳で開胸しまして、その当時は腹腔鏡もなくて胸腺も取り除き、それからもう 25 年になります。何とか今まで元気にやっています。このたびは賞をいただき、ありがとうございました。

仲田 やす子 さん（89 歳）千葉県在住　作品タイトル:「心のアルバム 想い出の四季」（アルバム）

※表彰式欠席のため、受賞コメントに代わり、応募時の応募エピソードを記載しております。

＜仲田さんの応募エピソード＞

ちぎり絵の「百景達成」を記念して、平成 27 年 7 月 31 日、私は、アッヴィ／エーザイ自己免疫疾患アートプロジェクトの表彰台に立っていました。お礼の言葉を述べながら感動の余り、なんとも言えない幸せにあふれ、目の前が霞んでしまいました。発病から 15 年、こんなに穏やかな雰囲気に包まれたときは、一度もありませんでした。安心できる環境が、どんなに大切かがよくわかりました。でも、前回のアートプロジェクトに応募しなければ、確固たる闘病の方針を決めることはできませんでした。何かを考えるには、自信と実力がなければ発揮できません。今はまだ、20 景の完成が残っている課題を仕上げようと考えています。

今回の応募作品は、見開き部分の金具のつけ方に苦労しながら、四季の生活を表現した 10 景を選び、アルバムに仕上げました、「難病も　心は豊か　和紙日和」。

【講評】

公益社団法人日本リウマチ友の会 会長　　長谷川　三枝子　さん

佳作 4 作品がリウマチ患者さんであることは、受賞作品が決まるまではわかりませんでしたが、みなさんが受賞されたことを、同じリウマチ患者として嬉しく思います。

今の医療の中でリウマチ患者さんの姿は大変変わってまいりました。今回の佳作 4 作品に共通して言えるのは、診断され、薬のコントロールが出来るまでの痛み、そして、日常生活動作が出来なくなった中で、この先どうしようという慈悲が、皆さんの作品の背景に描かれていました。そして、その中から一つずつ光が見えてきたというのが、今回の作品に共通していることかと思いました。また、4 作品ともに、色が明るく、穏やかな色使いをされているところ、病気をして、色んな思いをしながら 1 つ 2 つ乗り越えてきた思いが作品にでていたと思います。

abbvie

【参考】

＜アッヴィ　自己免疫疾患　アートプロジェクト　募集概要＞

◇募集内容

「テーマ：疾患と生きる。私の新たな可能性」に基づき、自己免疫疾患と向き合いながらも、患者さんご自身の PERSPECTIVES（視点、考え方、物の捉え方という意味）で捉えた心とカラダ、症状の改善などから見出した日々の喜び、新たな目標や希望などを自由に表現した作品と、作品の説明やエピソード（400 字以内）を募集。

◇応募資格

自己免疫疾患群（関節リウマチ・若年性特発性関節炎・強直性脊椎炎・尋常性乾癬・関節症性乾癬・クローン病・潰瘍性大腸炎・腸管型ベーチェット病・ぶどう膜炎など）の疾患をもつ患者さん

◇応募期間

2018 年 7 月 1 日（日）～11 月 30 日（金）消印有効

◇選考基準

作品のストーリー性、独創性

◇審査委員　※敬称略

- 社会福祉法人聖母会 聖母病院　皮膚科部長　　小林　里実
- 学校法人北里研究所 北里大学北里研究所病院炎症性腸疾患先進治療センター センター長　　日比　紀文
- 医療法人財団順和会　山王メディカルセンター　リウマチ・痛風・膠原病センター長、国際医療福祉大学　臨床医学医学研究センター教授、東京女子医科大学　客員教授 山中　寿
- ベーチェット病友の会　　秋山　悦子
- 日本 AS（強直性脊椎炎）友の会 事務局長、順天堂大学医学部整形外科・スポーツ診療科 非常勤講師　　井上　久
- 認定 NPO 法人東京乾癬の会 P-PAT 理事長　　大蔵　由美
- サルコイドーシス友の会 会長　　佐藤　公昭
- 公益社団法人日本リウマチ友の会 会長　　長谷川　三枝子
- 若年性特発性関節炎親の会 あすなろ会 事務局担当理事　　牧　美幸
- NPO 法人 IBD ネットワーク　事務局長　　吉川　祐一
- 美術家　　佐久間あすか

◇主催

アッヴィ合同会社